

亮太、ありがとう

生まれて5日目、病院での沐浴指導を受けている時、亮太のペラペラな両足をなでながらひょっとして歩くことができないかもしれないと思った。その途端、涙で亮太の足も何もかも見えなくなってしまった。5年後、亮太は園庭を、縄跳びをしながら走っていた。「不可能なことなんてない」とまで私は思った。両内反足・尖足、それが亮太の合併症だった。かかとは無く、明らかに元気な赤ちゃんの足ではなかった。生まれて1週間目からのギプス。1歳の時の手術。その後夜中も履き続けなくてはならなかった矯正靴。整形外科の医師の熱心な治療があったのはもちろんのことであるが、亮太自身の治療に対する忍耐強さと自分の力で動くことへの旺盛な好奇心には驚かされた。

通い慣れた幼稚園から小学校へ。普通の子供なら小学校生活を夢と希望で待ち望み…しかし亮太には厳しい現実が突きつけられた。障害児クラスへの在籍要請。その説明は親として決して納得のいくものではなかった。そんな混沌とした状況の中、亮太のひとことが親として私たちの進むべき道を照らしてくれた。「みんなと一緒に小学校に行きたい。」とにかくみんなの中で過ごせるように、ただ一つそれが実現できるよう親としては本当に何度も学校と話し合いを重ねた。6年が経ち、その集大成のような6年生の学芸会での劇。6年生チームの一員として亮太がそこにいた。

そして中学生。普通学級での生活はスムーズに確保できたが、片道30分以上の通学路など、親としての不安は尽きなかった。

中学2年生の文化祭。クラスで劇をやることになり、亮太の役は「額」の中のモナリザ…。それでもみんなと一緒に舞台上に立っただけで嬉しかった。ラストシーン！暗転、突如「額」からモナリザ(亮太)が飛び出し舞台の中央で歌、「夜空のムコウ」の熱唱。その後、客席から「アンコール、アンコール」の声が。この時、亮太の「みんなと一緒に…」の言葉を大事にしてよかったと改めて思った。

とにかく普通の社会の中で、できるだけ多くの人とコンタクトをとりながら生活することを心掛けて育ててきた。小さい頃から お習字、バイオリン、ピアノ、スイミング、英会話、ドラムとおけいこやレッスンを続けてきた「継続は力」とその言葉を信じつつ、ほとんどのおけいこを25歳の今も続けている。もちろん「モノ」になるなんて大それたことは考えていない。本人が続けることにより、よりhappyな時間を持てればいいし、レッスンやおけいこをすることにより社会の中でのコミュニケーションを続けていければいい、そう考えるばかりである。

亮太の25年を振り返った今、親子共に一番印象深いことは、クラーク高校2年の時のオーストラリア留学である。初めての親と離れての生活、それも8ヶ月間。オーストラリアでのお友達と過ごした時間、ホームステイ先でのママとのあたたかい関係は、私たち家族のかけがえのない大切な宝物となった。

生まれたばかりの亮太の足を見て、涙を流した時を今も忘れない。けれど、その足で園庭をなわとびで駆け回る亮太を見た時、親が子供の「不可能」を作ってはいけないと思った。その思いは8ヶ月間のオーストラリア留学でさらに確固たるものになった。

しかしまだまだ余裕のない生活を続けているこの頃…。ある日の夕方、メールの着信音が鳴った。「あっ亮太から！何かあったかな？」ちょっと不安がよぎる。けれどメールには「今、舞子あたりを回っています。夕日がとってもきれいで…」

亮太、ありがとう。これからも素敵なメッセージを家族に送り続けてね。